「今日の説教、聴き手のために」　2009/7/5　明治学院教会（160）

「目が澄んでいれば」　岩井健作牧師

コヘレトの言葉１１章９節－１２章３節

マタイによる福音書６章１９節－２４節

1、矢内原伊作氏は「顔」という随筆の「耳」の部分で「聞く人は信仰の人」と述べている。聖書の「信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉からくるのである」（ローマ10:17)を意識している。「キリストの言葉」はイエスの十字架の出来事の事実（神の義、ロマ3:22）が私たちを恵みの関係に繋いでいることを言う。教師、医師、保育者、母親、牧師、などは聞くことが役目の本質に関わる。

2、矢内原氏は「眼」については、「見ることは自己を形成すること」と記す。これは「本質」よりも「途上」の課題である。マタイ福音書の著者は、自分の教会の自己形成の問題を意識して「目が澄んでいれば」と語ったのではないか。

3、マタイ６章は、「Ｑ資料（語録）」に基づきイエスの言葉の伝承断片を集大成して、５－７章の「山上の説教」の中に位置づけたものである。この箇所の鍵語（キーワード）を「澄んでいる」（ハプルース）という言葉だとある福音書研究者は言った。この語は「分裂しない一つの心」を意味し、当時のヘレニズム・ユダヤ教では宗教的人間の模範的特徴を示す重要概念であった。それは、申命記の「心をつくし、精神をつくし、力をつくして神を愛せよ」(6:4-5) に基づく神への関係の集中であった。ユダヤ教では「施し」「祈り」「断食」でこれが表明されていた。６章では、その「澄んで」いるべきそれらの行為が偽善に傾いていることへの批判が語られている。例えば、富と神とを適当に使い分ける二元論に対してはマタイは神の義・神の恵みに生きることから始まる自己形成の問題を目のあり方に譬えている。「あれも・これも」ではなくて、目を澄ませていくことの中に神の恵みの関係が鮮明に自覚される。

4、コヘレトでは目についは８カ所言及されている（1:8, 2:10, 14, 4:8, 5:11[口語] 6:9, 11:7, 11:9)。コヘレトの目の引用のすべての箇所は、目は人を迷わすものとの見方をしている。「彼の目は富に飽くことがない」（4:8 ）といった具合である。引用した１１章は若者への戒めの箇所であるが、「目に映るところに従って行け・・・・神はそれらすべてについて、お前を裁きの座に連れてゆかれると」と反面教師的に用いられている。目を青年の自己形成のプロセスの大事な役割と見ているが、「若さも青春も空しい」(11:10) と人生のどん底にある否定を踏まえてのことである。その上で「青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ。」と、人生の諸段階の細部への気配りを促す。細部とは日々の積み重ねを意味している。その意味で、人生いつでも青春である。歳を重ねても遅くはない。

5、柏木哲夫医師は河合隼雄氏との対談「現代人の不安－死の受容」の中で、死に臨み、信仰をしっかり抱いている人、生半可な信仰の人、無信仰の人の三つのタイプのうち、生半可の人の不安が最も大きいと言っている。無信仰の人への肯定が面白い。「目が澄んでいる」のだ。信仰は観念ではない。神の「信」への関係である。